

芸術の知覚における失敗と成功

——失敗をベースにしたモデルの一例——

マシュー・ペラウスキ (mattpelowski@yahoo.com)

秋庭 史典

[名古屋大学]

Failure and success in the perception of art: A case for a failure-based model

Matthew Pelowski, Fuminori Akiba

Graduate School of Information Science, Nagoya University, Japan

Abstract

In the study of art, the philosophical tradition, and important assumptions within this tradition, forms the basis for psychological conceptions and cognitive models of art perception, implicit goals and approach to art-viewing, and their application to art education and viewer relations. However, the prevalent philosophical conception of art and aesthetic experience, which share the assumption that success or “cognitive mastery” drives aesthetic perception, contains fundamental flaws, which extend to, and ultimately constrain, the study and application of art. While existing conceptions explain how a viewer masters the environment, based upon prior expectations and abilities, they cannot explain how they come to perceive and be transformed by, something new; nor can they account for how this feels. Yet, it is exactly these qualities in art-perception that both philosophers and social scientists agree constitutes the unique “challenge” of art. It is necessary that this be examined, and a solution considered, building from the philosophical basis and then extended to a psychological discussion. We argue that, in opposition to success, a failure-based model, organized around the conflict between self-protection and self-transformation in the processing of discrepancy, is better able to explicitly unite cognition, emotion and physiological effect with perception and evaluation; and allows for needed discussion of perceptual and conceptual change within experience, and a needed distinction between “facile” evaluation and mastery following meta-cognitive reflection and adjustment. We explore both success and failure-based approaches and introduce conceptual and contextual aspects for a five-stage failure-based model of art-perception culminating in “Aesthetic Experience”; discuss the inter-relation of emotional and cognitive factors that may be important for objective research on art evaluation and art education; and clarify the important tie between failure, epiphany and perceptual growth in the experience of art.

Key words

aesthetic experience, emotion, art-evaluation, cognitive dissonance, epiphany

1. はじめに

何世紀ものあいだ、芸術作品の鑑賞者は、作品という環境とのインタラクションによって打ちのめされ、心を動かされ、自分を変えられたと報告している。従来、このような、芸術作品という環境とのインタラクションを通じた鑑賞者の変容的 (transformative) 経験は、「美的経験 (aesthetic experience)」の名で呼ばれてきた。

しかし、これまでこの経験を説明するために使用されてきたモデル (これを「成功モデル」と呼ぶ。後に詳述する) は、いくつかの難点を抱えている。

この問題を解消するために、ここでわたしたちが提案するのが、「失敗をベースにしたモデル」である。以下の論述は次のように進む。第2章では、種々の報告に共通する美的経験の特徴を先行研究に基づき確認する。第3章では、この特徴に照らして、既存の「成功モデル」が

いくつかの難点を有しており、美的経験の説明には不適當であることを示す。以上をふまえ、第4章では、「失敗をベースにしたモデル」の可能性を提案する。その際、導き手として、心理学、社会学の研究に加え、哲学者であり教育学者の John Dewey による研究を参照する。

2. 美的経験の特徴

芸術作品の鑑賞者が、作品とのインタラクションによって自分を変えられたとする報告は、それこそ枚挙にいとまがない⁽¹⁾。

時代、言葉遣い、対象の違いはあっても、これらの報告の著者が美的経験を記述する際、基本的に同じことを述べているのは、注目に値する。これまでに美術史家や哲学者は、古典的な美的経験 (the classic AE) の特徴を、次の三点にまとめている (e.g., Shusterman, 1997)。①美的経験は、「わたしたちのなかに割り込んでくる」(Fenner, 1996)、「強く複雑なもの」(Dickie, 1974) であり、「日常の活動を停止させる」(Ingarden, 1961)。②美的経験は、高められた意識 (Ferree, 1968) であり、「完全な瞬

間」(Schoen, 1941)である。③さらに、美的経験は、なんらかの「認知の瞬間」に終わり(Petts, 2000; Goodman in Shusterman, 1997)、「完成」し、そこでの歓喜や涙ながらの快(Maslow, 1959)は、緊張を解き放ち葛藤を解消することで(Crittenden, 1968)、わたしたちを高揚させ(Muelder-Eaton, 1995)、蒙を啓く(e.g., Shusterman, 1997; Smith, 1968)。

とりわけ、第一と第三の特徴が、美的経験を際立たせる要因であると考えられる。美的経験は、分裂させ、変容させ、教育する性質をもつのである。美的経験の意義は、芸術の類いまれな力、すなわち流れ去る生に楔を打ち、生を変化させる力にある。Danto(1986)の**ことば**を使えば、「何かを起こす」力である。

そして常に問われてきたのは、単純な刺激が、その刺激自身を変化させることなく、どのくらい人の経験を中断し、涙・喜び・怒り・痛みを引き起こし、終には鑑賞者に「悟り(epiphany)」をもたらすのか、である。この問いこそ、幾度となく美術研究の前に現れ、説明を要求してきたものなのである。

3. 成功モデルとその難点

3.1 成功モデルとは

この美的経験を説明するために、哲学者たち⁽²⁾によりこれまで採用されてきたモデルが、ここでわたしたちが、美的経験の「成功モデル」と呼ぶものである。それは美的経験を次のように説明する。

美的経験とは、鑑賞者が、「作品を分類し理解し、認知的に統御(mastery)することに成功」(Leder et al., 2004)し、それにより快を感じる経験を指す。したがって、重要なのは、鑑賞者が作品についてあらかじめ抱いている期待と実際の知覚が一致することである。それは、鑑賞者が、作品の知覚から、その作品についてのさまざまな情報(形式的特徴、意味論的特徴、歴史的な位置づけ、作者の意図、作品の評価など)をすみやかに推論し統合できることを意味する。快の感情は、この統合が成就した証である。

それは同時に、鑑賞者が、作品に関する情報の分類と理解ならびに知覚図式の高揚だけでなく、作品を理解できる自己自身の意味と価値(自己の尊厳)の維持にも成功していることを意味する。成功モデルにおける鑑賞者は、芸術作品との直面という特殊な環境のなかで、自らが作品と自己とを見事にコントロールするすべに習熟(mastery)していることを確認し、そこにも喜びを感じているのである。

ゆえに、個々人が芸術作品の「意味を理解する」のに成功する度合いが大きければ(Leder et al., 2004; Walton, 1993)、その分、彼らが作品を知覚するのも簡単になり、その分より喜ばしい結果をもたらすことになる、というのが、成功モデル支持者の考えである(e.g., Mitias, 1982)。

彼ら(e.g., Leder et al., 2004)はまた、この美的経験を、Csikszentmihaly(1990)の言う「フロー」であると説明し、美的経験の特殊性を強調する。それは、「特殊で日常的関

心を離れた意識の状態」であり、「そこでは、今・ここで活動、かけがえなく悦ばしい今・このときだけが意識されている」のである。

3.2 成功モデルの難点

しかし、このモデルにはいくつかの難点がある。第一に、成功モデルは、美的経験を、フローすなわち日常的自己意識から離脱した活動の状態としている⁽³⁾のだが、それがどのような状態であり、どのようにして自己の経験の善し悪しを同定できるのかは説明されていない(Arendt, 1958; Csikszentmihaly and Halton, 1981; Arnheim, 1969)。

第二に、成功モデルでは、作品が提供する知覚と鑑賞者の期待が一致する瞬間のみに注目しているため、鑑賞者が、どこからその正しい期待を手に入れるのか、またどのようにしてそれが正しい期待であると知ることなのか、まったく説明できていない。

第三に、もし知覚と期待が一致し、快をもたらすのが美的経験なら、鑑賞者は、実際には何ら新しいものを知覚しておらず、ただ彼らが見ることを期待していたものを「再認」しているだけ、ということになりはしないだろうか。あらかじめ有している期待が「強化」(Wenzel, 2005)されているだけであるなら、それは、美的経験についての数多くの報告(「わたしは打ちのめされた・・・」)と齟齬をきたし、美的経験の第一、第三の特徴を説明することができない。

さらに言えば、たしかに、幸運な一致により日常的自己を離れたフローという至福の状態が鑑賞者に訪れるという成功モデルの説明は、美的経験を神秘化・特権化し、他のさまざまな経験からの自律性を確保するのに貢献したかもしれない。しかし、この立場を採るなら、通常の経験とは違う「美的」経験とは何かを説明しなければならないはずである。が、彼らはただ、それが美的対象に関わる経験であるという循環的説明しかできない(逆に、美的対象とは、美的経験のなかで成就される対象であるという)。

このような難点を考えた場合、成功モデルとは異なる別のモデルを提案することがどうしても必要になる。本章では、わたしたちの考えるモデル(以下ではこれを「失敗をベースにしたモデル」と呼ぶ)を提案しながら、それがどのような点で成功モデルよりも優れているのかを、説明していきたい。

4. 失敗をベースにしたモデルとその利点

何よりも重要なのは、〈作品とのインタラクションが、個人を日常的自己から離脱させ、それによりあらかじめセットされている一連の期待、知覚の図式を喚起する〉とする成功モデルがもつ難点を取り除くことである。そのために、離脱に代えて個人の成熟を、プリセットされた図式の呼び出しではなく期待の変容を説明するメカニズムを、モデルに組み入れていく必要がある。それにより、美的経験のさまざまな報告やそれを基にした特徴づけに、可能な限り一致する、新たなモデルを提案することがで

きるだろう。

もちろん、その導き手となるものはすでにある。経験の「変容」に伴う感情と認知に関するさまざまな認知心理学的研究（とりわけ認知的不協和と自己イメージに関する研究 Steele et al., 1993; Carver, 1996; Rothbaum et al., 1982）⁽⁴⁾ と社会学的研究、そして、それらを先取りするかたちで経験の変容をすでに主題化していた哲学者・教育学者 John Dewey (1980; 1956; 1951; 1950; 1929) の学説がそれである。Dewey の提出した視点を基にすれば、これまで個別に研究されてきたさまざまな認知心理学研究や社会学研究を結びつけ、新たな「失敗をベースにしたモデル」を導入することができる。こうした、認知心理学や社会学の成果をデューイの考えに基づいて結びつけたモデルを提案することは、従来研究に見られない、本論文の新しい視点である。はじめに Dewey の考えを確認しておきたい。

Dewey (1951) は言う。「美的経験における葛藤の重要性を否定する代わりに」、「それが不可欠のはたらきをすることを強調してきた」と。ある経験が「美的」になるのは、鑑賞者が、自分の置かれた環境にある、なんらかの新しい質に注意を向けるよう強いられるときだけである。この新しい質にあらかじめの期待を適用する際に起こる最初の「失敗」あるいは最初の「不一致」が、情報統御の試みから鑑賞者を逸脱させ、自己意識、メタ認知的評価、再調整を引き起こす推進力となる。これは新たな経験を創ることにつながり、個人の成長と新たな知識の獲得をもたらす、と考えたのである。さらに Dewey (1980) は言う。芸術の知覚と評価は、二つの異なった状態からなる。第一のものは、あらかじめの期待と知覚がうまく一致することである。第二のものは、鑑賞者の期待や図式そのものの「新しい編成」であり、情報と鑑賞者の関係の根本的な変化と、芸術と鑑賞者の経験的関係の根本的な変化である (Dewey, 1951; Doll, 1972)。その際彼は、第一の状態から第二の状態への移行が、経験の情動的ピーク（彼の言う経験の「美的フェーズ」）をもたらすと言う。この情動的ピークは美的経験の最後に起こり、失敗と自己変容からなる美的経験のプロセスを完成させる、とされる (Dewey, 1950)。

Dewey のこうした考えに基づき、「失敗をベースにしたモデル」を、次の5段階からなるものとして提案したい。①先行的期待と自己イメージ、②認知的統御、③二次的コントロールと逃避、④メタ認知的再評価、⑤美的フェーズ（顕現など）。これらは、芸術の知覚における不一致に始まり、「美的」顕現あるいは「美的」統御において頂点に達する諸段階である。各段階が、近年のどのような認知心理学あるいは社会学の研究によって裏打ちされているかは、その都度述べていく。

また、この提案された「失敗をベースにしたモデル」が、どの点で成功モデルよりも有利なのかは、モデル提案後に説明することとしたい。なお、われわれがここで「失敗をベースにしたモデル」という場合、それは「失敗」を経由した成功について語るモデルであり、単に失敗し

続けることだけを意味しているわけではないことをお断りしておく。

4.1 第1段階：先行期待と自己イメージ

多くの心理学研究が、個々人は、何らかの経験が始まる以前に、〔自己の〕環境のなかにあるさまざまな対象と相互作用する行為を導くための期待と、行為の結果へのよくある反応という、期待と反応のセットを持っていることを明らかにしている (e.g., Epstein, 1973)。

また個々人は、対象だけでなく、自分自身や他者のふるまいに関する、個人的な「基本意味セット」をも持っている (Lawler & Thye, 1999)。そこには、自己評価のさまざまなレベルも含まれている (Steele et al., 1993; Morgan & Schwalbe, 1990)。こうした要請が組み合わさって、個人の「理想的自己イメージ」(Carver, 1996) を構成する。そして、自己イメージ内部における諸要請の特殊な配置が、個人の行為を駆動させる (Steele et al., 1993; Lawler & Thye, 1999; Morgan & Schwalbe, 1990; Lazarus, 1982) とされている。

社会学においても同様である。個人は、「自己を高く評価したいというベーシックな欲求」を持っている。個人は、「不承認と不安」を避けつつ欲求を満たそうとするのである。これは、理解とコントロールのための欲求、社会の一員でありたい、そこから逸脱しないよう行為したいという欲求である (Goffman, 1974; 1963)。

であるなら、美的経験（とりわけ芸術の知覚や芸術の経験）が、このような、経験以前の対象や自己に対する期待と無縁の特別な経験であると考えるのは、不自然なことだろう。Lawyer & Thye (1999) のことばを借りるなら、個々人が、「根本的な意味（彼らが正しいと信じている意味）と経過的な意味（彼らがある時点で経験している意味）のあいだに一貫性を求める」傾向は、美的経験においても起こるはずである。

その際に重要なのは、個々人が、こうした経過的・暫定的な自己モデルにフィットし、すでにある自己イメージを強化するものに注意がちな点であるという点である。Taylor & Brown (1988) は記している。「一連の社会的・認知的フィルターが、情報をいびつな仕方ではポジティブにし」、「これらのフィルターを逃れるネガティブな情報は、できるだけ〔自己イメージにとって〕脅威にならないような仕方では表象される」。個々人は、いまある自己イメージを保持するためには、「自己欺瞞」さえ用いる、という論者もある (Gur & Sackeim, 1979; Epstein, 1973)。個々人は、自己イメージに脅威を与える状況から逃れ、できるなら分裂した状況を避けるために、能動的に働くのである。

こうした一連の研究結果をふまえて美術館来訪者に関する従来の研究を見直すことにより、わたしたちは、芸術作品の経験のばあい、鑑賞者の先行期待として、次のことがらを想定してよいと考える。①作品にはそれを制作した創造者がいる。したがって、②「芸術作品は、芸術家の個性を表している (Hickey, 1993)。③「作品の受容

には、受容者が技術的に〔制作者と〕同じタスクにアプローチできる可能性が含まれている。したがって、鑑賞者が、芸術家の動機に照らして、制作プロセスを心的に再構築し、「創造者の偉業」あるいは技術を「再認すること」(Gell, 1998)が、芸術の理解である。まとめれば、④たいていの場合、美的経験（とりわけ芸術作品の経験）における期待は、次のような自己強化を目標としている。すなわち、芸術家の意図と作品の意味を理解することで知識を獲得し、自分がある文化のメンバーでない「他人」から区別し、それにより、文化とそれに携わる自分の地位を享受することである (Goulding, 2000; Jansen-Verbeke & van Rekom, 1996; Hendon et al., 1989; Buermeyer, 1947)。

4.2 第2段階：認知的統御と不一致

すでに述べたように、環境内の刺激と出会う際、個々人は、その出会いをうまくコントロールしようとする。そのとき個々人がまず行うのは、先行期待や思い込みに基づいた同一性認定や分類であることが知られている (Gilbert et al., 1992; Mele, 2003; Tyler in Guthrie, 1993)。芸術作品の経験でも、まずは、目の前の対象が何かという分類から始めると考えるのが妥当だろう。

いったん分類がなされ、「芸術作品」が与えられれば、鑑賞者は通常、作品の背後にある動機や目的に関する推論を行う。いったん分類と評価のモードがセットされれば、今度は、鑑賞者は、あらゆる情報を、最初の分類／動機に合うような一貫した意味を形成するために位置づけたり組み合わせたりしようとする。そうして最後に、鑑賞者は、適切な評価の反応あるいは適切な身体的反応を形成しようとするであろう。

しかし、当然のことながら、先行期待のなかにある分類や動機にフィットしない情報、簡単には結合しない要素がある。さまざまな「不一致」が、知覚された情報とそれに関連する自己とのあいだ、知覚された情報と他の重要な概念とのあいだ、等々に生じる。

そこで何が起こるのだろうか。「認知的不協和 (cognitive dissonance)」に関する研究によれば、情報の不一致がある場合、個々人は、認知的統御の段階の内部で、この不一致を処理することができる。その処理方法とは、不一致を無視するか、あるいは、不一致を分類に無理矢理同化させることである (Festinger, 1957)。

ただし、個々人が、不一致を克服できる、あるいは後に説明して解消されるだろうという自信がある場合には、彼らはさらに時間をかけ、この不一致を明確にするために、さらなる情報を得ようと試みるだろう (Goethals & Cooper, 1975)。

また芸術的状况については、Bloom & Markson (1998) が⁽⁵⁾ 次のように記している。鑑賞者は、ある作品に対面したとき、それを作った芸術家に、ある程度の自由度を認めようとする、と。Parsons (1987) も同様のことを述べている。「芸術家の意図という思想が、〔作品は〕たとえそれが何かわたしたちに理解できない場合でも、なんらかの主観的な意味を有していると信じることを可能に

している」。

しかし、この不一致があまりにも大きな場合はどうなるであろうか。そのとき鑑賞者は、彼の分類を拡大することも、知覚をすることも、不一致な要素を受け入れるために先行期待を変えることもやめてしまうのである。それは、Rothbaum et al. (1982) の言う「〔自分をではなく〕世界の方を変える」行為である。そのことにより、鑑賞者は、自分が有する現在の期待や理想の方を維持するのである。そこで経験は、次の段階に移る。

4.3 第3段階：二次的コントロールと逃避

不一致が同化もされず、かといって無視もできないほど大きく、しかも後続する情報が不一致を解消しないと、加えて、鑑賞者が、自分は間違いを犯していないと信じているとき、鑑賞者は次のフェーズに移行する。

Steele et al. (1993) は記している。この時点で、不一致は、自己強化ではなく、自己防衛のストラテジーが、大きな役割を果たし始め、緊張や不安が広がり始める、と。この場合、不一致の状況を受け入れ続けることは、第1段階で述べた理想的自己イメージという先行期待に照らして考えれば、自己を否定することにつながる。そこで、環境の側を否定することになるのである。Rothbaum et al. (1982) は、最終的に不一致を無視できるよう環境の条件を変更するこうした試みを、「二次的コントロール (secondary control)」と呼んでいる。

では、ここで何が起こるのだろうか。わたしたちは、それが、「再分類」(From, 1971; also Norman, 2004) と、再分類に「失敗」した挙句の「逃避」(Rothbaum et al., 1982; Steele et al., 1993) であると考える。

芸術作品の経験に即して言えば、次のような現象が起こるであろう。再分類とは、鑑賞者自身が作品を理解するのに失敗したと思うのではなく、芸術家の方が、作品の制作に失敗したのだと考えることである。作品を、ダメな作品に分類し直して納得するのである。この再分類を行うことすら失敗する場合、鑑賞者は、たとえば、その作品のある部屋から出て行くか、他の人に、“しょせんこれはアートなんだ、そんなものはどうでもいい”と言いつつ (Lerner & Miller, 1978; From, 1971)⁽⁶⁾。これが逃避である。

4.4 第4段階：メタ認知的再評価

しかしながら、同化や、それに続く逃避が失敗するか実現されずに終わるばあい、個人は、どうしようもない状況におかれることになる。そこで個人は、環境との相互作用から逃れることも、それが自分に与える影響から逃れることも、その影響を変えることもできない。このとき個人は、能動的に、自らの経験と期待を再査定する段階に入ると考えられている。またこの出来事は、鋭い自己への注意を伴うと言われる (Steele et al., 1993)。

さまざまな論者がこの段階について述べている。個人は、コントロールをあきらめ、不一致を受け入れる。これまで不一致を克服しようとしてきた試みが「失敗」し

たこと、起きてしまったことをなしにするのは実際不可能であると認めるのである。そこで個人は、自己の認知活動、すなわち、何かをコントロールするために自分が行ってきた行為や自分が抱いていた期待を、メタレベルから再査定し、対象や、課題や、最終的には自分自身に対するさまざまな期待を、再構築するとされている (Miceli & Castalfranchi, 2003; Efran & Spangler, 1979)。

興味深いのは、この段階に至るためには、何らかのトリガーが必要であることを、いくつかの研究が述べていることである。そのトリガーとは、解消不能な矛盾を突きつけて、個人を現実と差し戻すものであり、場合によっては、自己の身体を意識させるものがトリガーとなることもある。たとえば、「郵便受けに入っていた離婚届」(Frey, 1985; Sloboda, 1985; 1991)、鏡像やカメラ、テープレコーダー、自分を見つめる他人など、自分の姿や声といった身体的要素を意識させるもの (Rothbaum et al., 1982) である。自分を見つめている絵 (a painting watching you) もこうしたトリガーとして挙げられている (Duval & Wickland, 1972) ことである。たしかにこれらは、環境の統御の失敗や、理想的自己のイメージの崩壊を告げるものである。

もうひとつ興味深いのは、不協和的経験がこうしたメタ認知的再査定をもたらすまでに個人を疲弊させるには、ある程度の時間が必要だとされていることである (Rothbaum et al., 1982)。Arnheim (1966) や Sakurabayashi (1957) は、知覚課題を行う際、被験者の先行期待が改訂されるまでに、大まかに見積もって 10 分が必要であると述べている。

4.5 第 5 段階：自己の変化と美的成果

最終的な失敗の受け入れと、期待の変化、それに対応する自己イメージの変化。これらは、個々人が、対象や環境との相互作用をリセットし、始めからやり直すことを可能にする。個々人は、新たなストラテジー、新たな期待のセットを用い、より調和的な環境との相互作用や新たな統御を可能にする。そして、以前には不一致であった要素に向かうことができる。そのように報告されている (Sarason et al., 1996; Dewey in Petts, 2000)。

こうした図式の変更成功することはまた、別のさまざまな研究によって、何かはがはっと現れた (epiphanic) という、強い身体的感情 (情動) と結びつけられている。それは、「カタルシス的」解放の感情であったり、神の顕現の感情であったり、蒙を啓かれた感情であったり、調和の感情であったり、安心の感情であったり、快であったり、さまざまであるが、特に興味深いのは、そこに「涙 (tears)」も含まれていることである (Efran & Splanger, 1979; Frijda, 1989; Labott & Martin, 1988; Miceli & Castalfranchi, 2003; Vingerhoets et al., 1995)。

こうした情動は、「認知的あるいは心理的再編成に到達したサイン」(Efran & Splanger, 1979) とされる。Dewey (1950) はこれを、経験の「美的フェーズ」と呼び、その重要性は、これに先立つ不一致とメタ認知的再査定にあるとしている。(期待や自己イメージを変えることができず、抑うつスパイラルに入ることもないわけではない。)

4.6 失敗モデルの利点

本章の最後に、わたしたちの提案した、失敗をベースにしたモデルが持つ利点について、3.2 で指摘した成功モデルの難点と対比して述べておきたい。①成功モデルでは、日常的自己を離れたこの経験の特殊性を説明する必要がある。しかし失敗をベースにしたモデルでは、美的経験を、日常的自己から切り離された神秘的で特別な経験と考える必要がなくなり、その神秘を説明する必要も取り除かれる。また、この経験に伴う強い情動も、神秘に由来するのではなく、認知の結果と考えることができる。②成功モデルでは、鑑賞者が、作品の提供する知覚に一致する図式を一挙に獲得すると説明するため、どこからそれが知られるのかが説明できなかつたが、失敗をベースにしたモデルでは、それが失敗を経由した後に獲得されるものであると示すことができる。③成功モデルは、種々の報告に現れる、芸術作品との相互作用がもたらす重大な自己変容について、その理由を説明できなかつたが、失敗をベースにしたモデルならそれを説明できる。さらに、失敗をベースにしたモデルを想定することにより、他の問いにも答えることができる。たとえば、同じ作品をある人は美、別の人は醜と感じるのはなぜなのか、という問いに対し、この違いを、そのとき鑑賞者がいる段階の違いから説明することができる。すなわち、5 つの段階のうち、不一致の段階にある人にとって、その作品は醜であり、さらに上の段階にまで進んだ人にとっては、同じ作品が美と感じられるのである、と。

5. おわりに

本論文でわたしたちは、John Dewey の提出した視点を基にして、これまで個別に研究されてきたさまざまな認知心理学研究や社会学研究を結びつけることにより、新たな「失敗をベースにしたモデル」を提案することを試みた。また、このモデルが、従来の成功モデルよりも、美的経験をよりよく説明できることを論じてきた。今後は、この「失敗をベースにしたモデル」を想定し、具体的な芸術作品の経験の分析に即して、このモデルに十分な検討を加えていくことが必要となるだろう。すでにわたしたちは、鑑賞者に強い情動経験をもたらすことで知られるマーク・ロスコ作品を展示した芸術的環境について、合衆国ヒューストンにあるロスコ・チャペルや日本の千葉県佐倉市にある川村美術館ロスコ・ルームなどで実地調査を行っている (Pelowski & Akiba, 2008)。また、十分な検討を経たのちに、こうした分析の結果を実際の美術教育に取り入れていくことも、今後の課題と考えている。

引用文献

- Arendt, H. (1958). *The Human Condition*. University of Chicago Press. (志水速雄訳『人間の条件』、ちくま学芸文庫)
- Arnheim, R. (1966). *Toward a Psychology of Art*. University of California Press. (上昭二訳『芸術心理学のために』、ダヴィッド社)

- Arnheim, R. (1969). *Art and Visual Perception; A Psychology of the Creative Eye*. University of California Press. (波多野完治ほか訳『美術と視覚』、美術出版社)
- Bloom, P. & Markson, L. (1998). Intention and Analogy in Children's Naming of Pictorial Representations. *Psychological Science*, 9 (3), 200-204.
- Buermeyer, L. (1947). Art and the Ivory Tower. in J. Dewey, A.C. Barnes, L. Buermeyer, M. Mullen, V. De Mazia. *Art and Education*, Second Edition. The Barnes Foundation Press, 66-75.
- Carroll, N. (1986). Art and Interaction. *The Journal of Aesthetics and Art Criticism*, 45 (1), 57-68.
- Carver, C. S. (1996) Cognitive Interference and the Structure of Behavior. in I. G. Sarason, G. R. Pierce and B. R. Sarason. *Cognitive Interference: Theories, Methods, and Findings*. Lawrence Erlbaum Associates, 27-45.
- Crittenden, B. S. (1968). From Description to Evaluation in Aesthetic Judgment. *Journal of Aesthetic Education*, 2 (4), 37-58.
- Csikszentmihalyi, M. (1990). *Flow; the Psychology of Optimal Experience*. Harper Perennial.
- Csikszentmihalyi, M. & Rochenberg-Halton, E. (1981). *The Meaning of Things; Domestic Symbols and the Self*. Cambridge University Press.
- Danto, A. C. (1964). The Artworld. *The Journal of Philosophy*, 61 (19), American Philosophical Association Eastern Division Sixty-first Annual Meeting.
- Danto, A. C. (1986). *The Philosophical Disenfranchisement of Art*. Columbia University Press.
- Danto, A. C. (1992). *Beyond the Brillo Box; The Visual Arts in Post-Historical Perspective*. Farrar, Straus, Giroux.
- Dewey, J. (1929). *The Quest for Certainty: A Study of the Relation of Knowledge and Action*. Minton, Balch & Company. (河村望訳『確実性の探求』、人間の科学社)
- Dewey, J. (1950). Aesthetic Experience as a Primary Phase and as an Artistic Development. *Journal of Aesthetics and Art Criticism*, 9 (1), 56-58.
- Dewey, J. (1951). Experience, Knowledge and Value: A Rejoinder. in P. A. Schilpp. *The Philosophy of John Dewey*. Tudor Publishing Company, 515-608.
- Dewey, J. (1956). *The Child and the Curriculum, and The School and Society*. The University of Chicago Press.
- Dewey, J. (1980). *Art as Experience*. Perigree. (河村望訳『経験としての芸術』、人間の科学社)
- Dickie, G. (1974). Beardsley's Theory of Aesthetic Experience. *Journal of Aesthetic Education*, 8 (2), 13-23.
- Doll Jr., W. E. (1972). *An Analysis of John Dewey's Educational Writings Interpreted with Reference to His Concept of Change*. The John Hopkins University. University Microfilms.
- Duval, S. & Wicklund, R. A. (1972). *A Theory of Objective Self Awareness*. Academic Press, Inc.
- Elkins, J. (2001). *Pictures and Tears; A History of People Who Have Cried in Front of Paintings*. Routledge.
- Efran, J. S. & Spangler, T. J. (1979). Why Grown-Ups Cry; A Two-Factor Theory and Evidence from The Miracle Worker. *Motivation and Emotion*, 3 (1), 63-72.
- Epstein, S. (1973). The Self-Concept Revisited; Or a Theory of a Theory. *American Psychologist*, 28, 404-414.
- Fenner, D. E. W. (1996). *The Aesthetic Attitude*. Humanities Press Int.
- Ferree, G. (1968). The Descriptive Use of "Aesthetic Experience." *Journal of Aesthetic Education*, 2 (2), 23-35.
- Festinger, L. (1957). *A Theory of Cognitive Dissonance*. Trivisstock. (末永俊郎監訳『認知的不協和の理論-社会心理学序説』、誠信書房)
- Frey, William H. II. (1985). *Crying; The Mystery of Tears*. Winston Press, 1985. (石井清子訳『涙-人はなぜ泣くのか』、日本教文社)
- Frijda, N. (1989). Aesthetic emotion and reality. *American Psychologist*, 44, 1546-1547.
- From, F. (1971). *Perception of Other People*, B. A. Maher and E. Kvan (trns). Columbia University Press.
- Gell, A. (1998). *Art and Agency, An Anthropological Theory*. Oxford.
- Gilbert, D. T., McNulty, S. E., Giuliano, T. A., Benson, J. E. (1992). Blurry Words and Fuzzy Deeds; The Attribution of Obscure Behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, 62 (1), 18-25.
- Gilbert, D. T., Pelham, B. W., Krull, D. S. (1988). On Cognitive Busyness; When Person Perceivers Meet Persons Perceived. *Journal of Personality and Social Psychology*, 54 (5), 733-740.
- Goethals, G. R. & Cooper, J. (1975). When Dissonance is Reduced: The Timing of Self-Justificatory Attitude Change. *Journal of Personality and Social Psychology*, 32 (2), 361-367.
- Goffman, E. (1963). *Behavior in Public Places: Notes on the Social Organization of Gatherings*. The Free Press. (丸木恵祐ほか訳『集まりの構造-新しい日常行動論を求めて』、誠信書房)
- Goffman, E. (1974). *Frame Analysis; An Essay on the Organization of Experience*. Harvard University Press.
- Goulding, C. (2000). The Museum Environment and the Visitor Experience. *European Journal of Marketing*. 34 (3), 261-278.
- Gur, R. C. & Sackeim, H. A. (1979). Self-Deception: A Concept in Search of a Phenomenon. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37 (2), 147-169.
- Guthrie, S. (1993). *Faces in the Clouds; A New Theory of Religion*. Oxford University Press.
- Hendon, W. S., Costa, F., Rosenberg, R. A. (1989). The General Public and the Art Museum: Case Studies of Visitors to Several Institutions Identify Characteristics of Their Publics.

- American Journal of Economics and Sociology*, 48 (2), 231-243.
- Hickey, D. (1993). *The Invisible Dragon; Four Essays on Beauty*. Art Issues Press.
- Ingarden, R. (1961). Aesthetic Experience and Aesthetic Object. *Philosophy and Phenomenological Research*, 21 (3), 289-313.
- Jansen-Verbeke, M. & van Rekom, J. (1996). Scanning Museum Visitors. *Annals of Tourism Research*, 23 (2), 364-375.
- Kant, I. (1978). *The Critique of Judgment*. Oxford.
- Labott, S. M. & Martin, R. B. (1988). Weeping: Evidence for a Cognitive Theory. *Motivation and Emotion*, 12 (3), 205-216.
- Lawler, E. J. & Thye, S. R. (1999). Bringing Emotions into Social Exchange Theory. *Annual Review of Sociology*, 25, 228.
- Lazarus, R. S. (1982). Thoughts on the Relation of Emotion and Cognition. *American Psychologist* (September, 1982), 1020.
- Leder, H., Belke, B., Oeberst, A., Augustin, D. (2004). A Model of Aesthetic Appreciation and Aesthetic Judgments. *British Journal of Psychology*, 95, 489-508.
- Lerner, M. J. & Miller, D. T. (1978). Just World Research and the Attribution Process: Looking Back and Ahead. *Psychological Bulletin*, 85 (5), 1030-1051.
- Magherini, G. (1989). *La Sindrome di Stendhal*. Ponte alle Grazie.
- Maslow, A. H. (1959). Cognition of Being in the Peak Experiences. *The Journal of Genetic Psychology*, 94, 43-66.
- Mele, A. R. (2003). *Motivation and Agency*. Oxford University Press.
- Miceli, M. & Castalfranchi, C. (2003). Crying: Discussing its Basic Reasons and Uses. *New Ideas in Psychology*, 21, 247-273.
- Mitias, M. H. (1982). What Makes an Experience Aesthetic? *The Journal of Aesthetics and Art Criticism*, 41 (2), 167.
- Morgan, D. L. & Schwalbe, M. L. (1990). Mind and Self in Sociology: Linking Social Structure and Social Cognition. *Social Psychology Quarterly*, 53 (2), 148-164.
- Muelder Eaton, M. (1995). The Social Construction of Aesthetic Response. *British Journal of Aesthetics*, 35 (2), 95-107.
- Norman, D. A. (2004). *Emotional Design; Why we Love (or Hate) Everyday Things*. Basic Books.
- Parsons, M. J. (1987). *How We Understand Art; A Cognitive Developmental Account of Aesthetic Experience*. Cambridge University Press. (尾崎彰宏ほか訳『絵画の見方-美的経験の認知発達』、法政大学出版局)
- Pelowski, M., Akiba, F. (2008). The Zen Koan as a Tool for Western Art Education: How Can We Teach Our Students To Kill the Buddha? *Proceedings of 11th Biennale Conference: Education and Multicultural Understanding*, International Network of Philosophers of Education, 282-294.
- Petts, J. (2000). Aesthetic Experience and the Revelation of Value. *The Journal of Aesthetics and Art Criticism*, 58 (1), 61-71.
- Rothbaum, F., Weisz, J. R., Snyder, S. (1982). Changing the World and Changing the Self: A Two-Process Model of Perceived Control. *Journal of Personality and Social Psychology*, 42 (1), 5-37.
- Sakurabayashi, H. (1953). Studies in Creation: IV. The Meaning of Prolonged Inspection from the Standpoint of Creation. Originally published in *Japanese Journal of Psychology*, 23, 1953.
- Sarason, I. G., Pierce, G. R., Sarason, B. R. (1996). *Cognitive Interference; Theories, Methods, and Findings*. Lawrence Erlbaum Associates.
- Schoen, M. (1941). Aesthetic Experience in the Light of Current Psychology. *Journal of Aesthetics and Art Criticism*, 1 (1), 23-33.
- Shusterman, R. (1997). The End of Aesthetic Experience. *The Journal of Aesthetics and Art Criticism*, 55 (1), 29-41.
- Sloboda, J. (1985). *The Musical Mind: The Cognitive Psychology of Music*. Clarendon Press, Oxford.
- Sloboda, J. (1991). Music Structure and Emotional Response: Some Empirical Findings. *Psychology of Music*, 19, 110-120.
- Smith, R. A. (1968). Aesthetic Criticism: The Method of Aesthetic Education. *Studies in Art Education*, 9 (3), 12-31.
- Smith, R. E. (1996). Performance Anxiety, Cognitive Interference, and Concentration Enhancement Strategies in Sports. In I. G. Sarason, G. R. Pierce and B. R. Sarason. *Cognitive Interference; Theories, Methods, and Findings*. Lawrence Erlbaum Associates.
- Steele, C. M., Spencer, S. J., Lynch, M. (1993). Self-Image Resilience and Dissonance: The Role of Affirmational Resources. *Journal of Personality and Social Psychology*, 64 (6), 886.
- Taylor, S. E. & Brown, J. D. (1988). Illusion and Well-Being: A Social Psychological Perspective on Mental Health. *Psychological Bulletin*, 103 (2), 201.
- Vingerhoets, A. J. J. M., Van Geleuken, A. J. M. L., Van Tilburg, M. A. L., Van Heck, G. L. (1995). *The psychological context of crying episodes: Towards a model of adult*. (Unpublished manuscript). The Netherlands: Catholic University of Tilburg.
- Walton, K. L. (1993). How Marvelous! Toward a Theory of Aesthetic Value. *The Journal of Aesthetics and Art Criticism*, 51 (3), 499-510.
- Wenzel, C. H. (2005). *An Introduction to Kant's Aesthetics: Core Concepts and Problems*. Blackwell.

注

- ⁽¹⁾ Elkins (2001) は、こうした涙ながらのエクスタシーについて、数多くの例を挙げている。また Danto (1964, 1992) は、何度も、Andy Warhol の作品 “Brillo Box” との出会いについて、それが自分を虜にした「現代美術の原体験であり、それは自分を揺さぶり (shook)、その衝撃はその後四十年続き、自身の世界観を変容

させた (transformed) ことについて述べている。また Magherini (1989) は、芸術作品との衝撃的で自己変容的な経験をした患者に見られる「スタンダード症候群」について述べている。これらは多数ある同様の文献の一部にすぎない。

- (2) 美的判断に関する Kant (1778) の「無関心性 disinterestedness」概念の伝統を引く哲学者たちのこと。
- (3) この状態は支持者たちによって、「高められた意識」(Carroll, 1986; Dickie in Petts, 2000)、「高められた知識」(Smith, 1996)、あるいは「啓蒙」(McDowell in Petts, 2000) などさまざまに呼ばれている。
- (4) さらに不一致と二次コントロールに関する Rothbaum et al., 1982、自己変容に関する Efran & Splanger, 1979; Miceli & Castalfranchi, 2003 を加えた 3 種類の研究が参照される。
- (5) ここで参照されている論文のタイトルは、それが子供についての研究であることを謳っているが、同論文では子供が持つ性質を人間に共通の自然的性質とみなしているため、同論文の結論は、成人にもある程度妥当すると考えられる。
- (6) 「しょせん芸術・・・」のくだりは、From 1971 に出てくる「しょせん映画なんて」をもじったものである。

(受稿：2009年7月24日 受理：2009年9月30日)